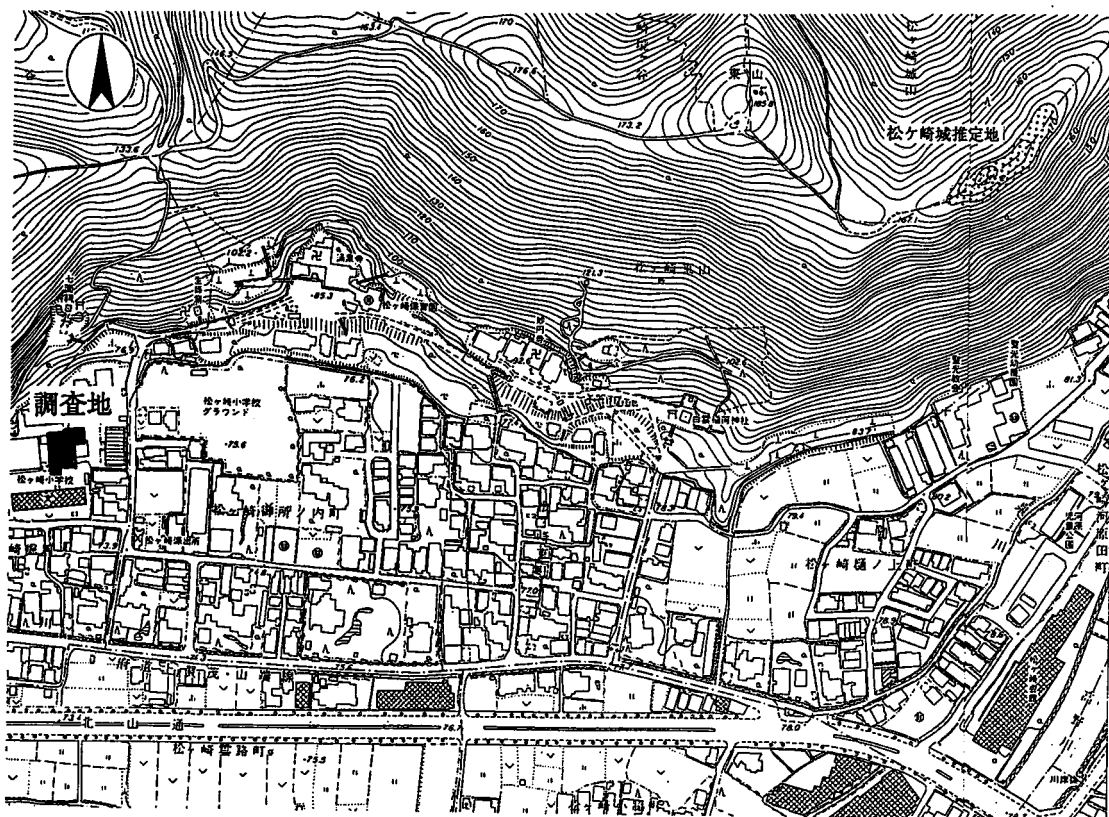


- 調査地・・・ 京都市左京区松ヶ崎堀町40・京都市立松ヶ崎小学校校地
調査期間・・・ 1993年3月5日 ～ 継続中
調査面積・・・ 448 m²
調査委託者 京都市
調査機関・・・ (財)京都市埋蔵文化財研究所



調査位置図 (1/5000)

はじめに

松ヶ崎麁寺は平安時代中頃に源保光により創建された寺院で、当初天台宗延暦寺派に属し円明寺と号した。

「中納言源保光卿供養松崎寺、号円明寺」（『日本紀略』正暦三年(992)六月八日条）
後に寺名を歓喜寺と変え延暦寺の末寺として続いたが、徳治二年(1307)に当時の住職実眼によって法華宗に改宗し、妙泉寺と寺名を改めた。その後、天文期には背後の城山に築

造された松ヶ崎城とともに法華一揆の拠点の一つともなったが、天文五年(1536)七月廿二日、天文法華の乱の際に山門衆徒の松ヶ崎城攻撃によって焼失した。

「法華衆打廻、卯刻松ヶ崎城落」（『鹿苑日録』天文五年七月廿二日条）

しかし、天正三年(1575)には日蓮宗妙伝寺の末寺として再興され、寺内には五院の塔頭を構えた。これらの塔頭は明治八年には本寺に合併され、さらに大正七年には当松ヶ崎小学校の敷地拡張に当たって東接する本涌寺（現涌泉寺）に合併された。

「本府教部省に稟定シテ府下松ヶ崎妙泉寺塔頭止静・宝泉・宝成・大乘・玉禅ノ五ヶ院を同寺ニ合併ス」（『松ヶ崎妙泉寺塔頭の合併について』府庁文書明治八年十月十日）

調査の経過

松ヶ崎小学校校地では1976年に校舎増築にともなって、松ヶ崎廃寺を対象にした発掘調査(校地南側西部)を実施している。この調査では調査面積が120㎡と狭小なこともあって、室町時代後半から江戸時代にかけての土壌、井戸や土器、陶磁器などの遺物を検出したものの、これらの遺構と寺院との関連は明確にしえなかった。この度、建設計画が立てられたため、1992年12月21～28日にかけて建設予定地に小トレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、南方（試掘2）において東西方向およびそれに取り付くものと見られる南北方向の石垣の一部を検出し、出土遺物からこの遺構が妙泉寺に関連する時期のものと判断されたため、発掘調査を行うことになった。調査は試掘で検出した石垣と、それによって構成された壇上部の遺構の調査を主眼に1993年3月5日から開始し、現在も継続中である。その経過のなかで石垣列の延長あるいは石垣前面の低地部を濠とした場合想定される対岸の石垣を追及して調査区北部、南部および西部に拡張区を設定した。

遺構・遺物

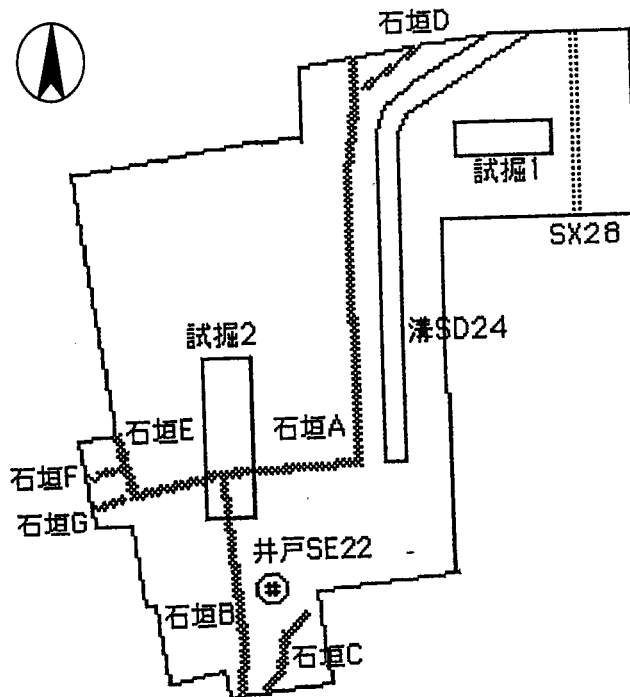
これまでに検出した主要な遺構は石垣、溝、土壌、石室、井戸などがある。

【石垣A】 試掘で検出した石垣で、調査区西壁から約13m東方向に延び、北へ方向を変える。北壁まで約18m検出した。石垣裏側に厚さ約1.5m以上の整地土を確認した。

【石垣B】 石垣Aに取り付く南北方向の石垣で約15m検出した。

【石垣C】 南拡張区の石垣B前面に検出した石垣で、石垣B付近から北東方向に蛇行する。裏込めには焼土が混じる。

【石垣D】 調査区北壁付近で石垣Aに付く東西方向の石垣でやや北東方向に斜行する。



主要遺構配置模式図

【石垣E】 調査区西部の南北方向の石垣で西壁に石積の裏側がかかっていたため、西側に拡張し検出した。石垣Gの調査が終了していないため不確定の要素はあるが、裏込めの検出状況から見て石垣Aに接続するものと考えられる。

【石垣F】 石垣Eの前面の低地部がある程度埋まった後にそれに取付けられた東西方向の石垣で、基底部の堆積および裏込めには焼土が混じる。

【石垣G】 石垣Fの背後に検出した東西方向の石垣で位置や方向は石垣Aにほぼ揃うが、面が逆である。前面に焼けた壁土様のものを検出した。

【井戸SE22】 石垣B東側に検出した石組み井戸で、石組みは約2m残存している。その下部に方形の木組みがある。底部は未確認である。

【溝SD24】 石垣A南北方向部に沿って走り、北部で石垣Dに沿って斜行する溝で、石垣Aよりかなり後世に掘られたと考えられる。江戸時代の遺物が出土した。

【SX28】 石垣A東方約10mに検出した南北方向の遺構で、溝状の掘り込みに拳大の石が敷かれている。この部分から東側が一段高いことから石垣Aの南北方向部に対向する石垣基底部の根石の可能性はある。

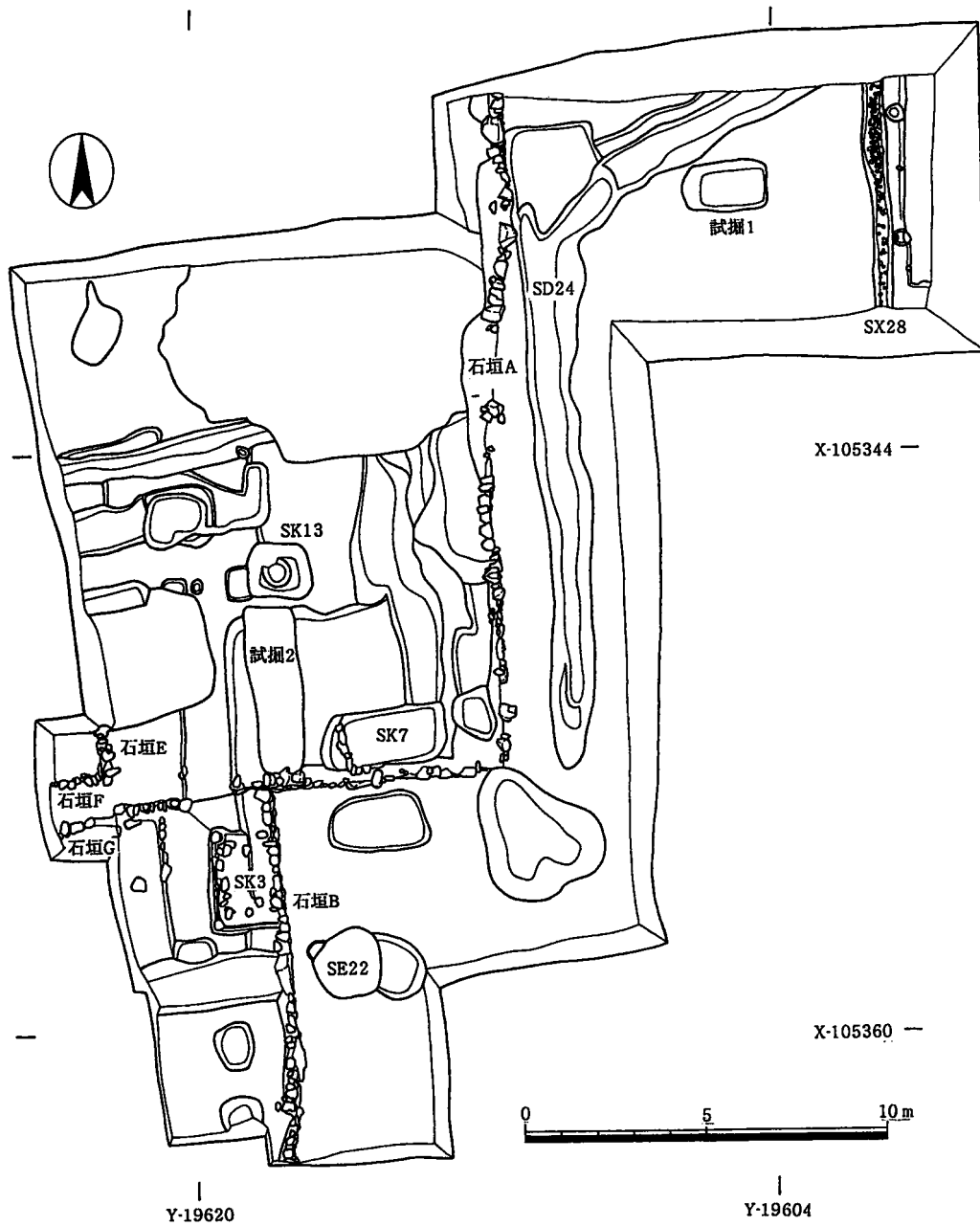
まとめ

調査はなお継続中であり、ここで遺跡に関する結論を述べるのは早計であるが、現段階で判明していることは、まず遺構の築造の前後関係であるが、検出状況や整地土層の層序から見て石垣群の中では石垣AおよびEがもっとも初期のものと考えられ、次に石垣B、Gがこれに取付けられたかあるいは並存したものと思われる。そしてその後に石垣CとFが裏込めに焼土が混じっていることから、ほぼ同時期に築造されたと見てよいだろう。石垣Dは裏込めから江戸時代の遺物が出土することや、配置関係からみると溝SD24と関連するもので、これらの中ではもっとも新しく構築されたものと考えられる。

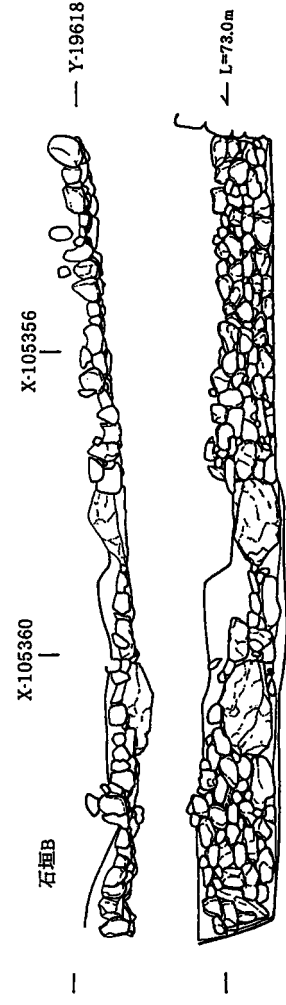
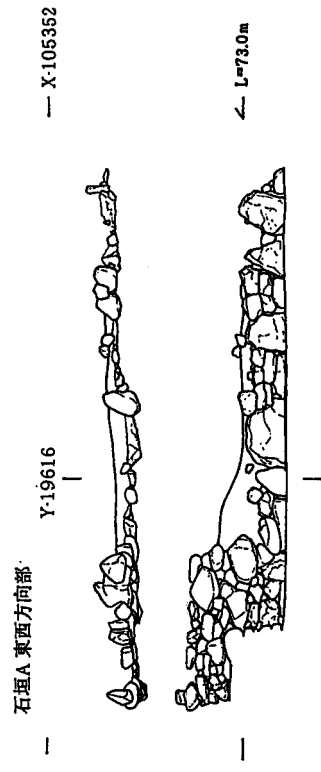
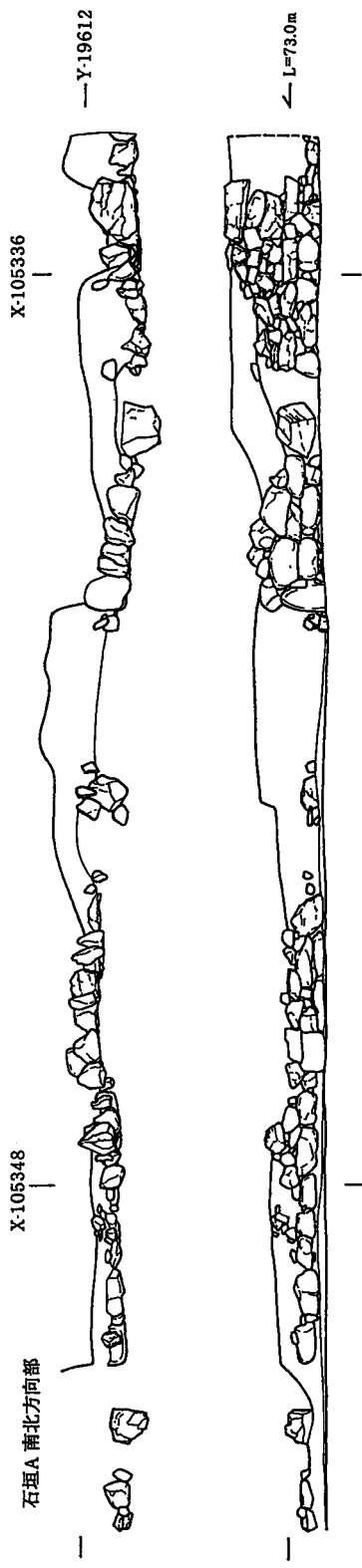
次に、遺構の築造時期については、裏込めや整地土層から出土した遺物からみて石垣A、E、B、Gが16世紀前半代を下るものではなく、石垣C、Fは16世紀後半代に比定できる。

井戸SE22は底部まで完掘しておらず、出土遺物が非常に少ないが石垣Cに近い時期とみている。石垣Dおよび溝SD24は前述したとおり江戸時代のもので、17世紀後半代までの遺物を含んでいる。ただ石垣Aの南北方向部は石垣Dや溝SD24との関係や前面の出土遺物から見て江戸時代まで存続していたようである。

こうした事実関係からこれらの遺構が天文法華の乱を含む時期にまたがったものであることは明らかで、石垣CとFの裏込めの焼土が乱に関連し、これらの築造が天正期の再興にかかわるものであるという可能性が非常に高いものと考えられる。しかし石垣A、Eの裏側整地土の下部にはさらに濠状の落ち込みが観察できることもあり、各遺構と法華の乱のより具体的な関連づけは今後の調査によらざるを得ない。さらに出土遺物の中には平安時代の瓦も含まれており、円明寺あるいは歓喜寺に関連する遺構の検出も期待できるところである。



遺構実測図 1/200



石垣実測図 1/100